

夕陽會報



第187号

はじめてクリスマスファンタジー



◇巻頭言◇

転機

副会長 尾 島 悌 介
(昭和34年卒)

一五三三年、英王ヘンリー八世は妻キャサリンとの間に離婚問題を起こすが、この国王のプライベイトな問題が転機となつて、イギリスは西欧の三流国から短期間に、世界最初の近代市民社会へと発展を遂げるのである。

即ち、キャサリンの父は新大陸の富を独占し西欧に君臨していたスペイン王だったが、その権勢に頭の上がないローマ法王も教義で離婚を認めないのを楯にヘンリーを破門した。怒ったヘンリーは国内の修道院領を没収して国王を最高権力者とする独自の英国教会を打立て、没収財産で王室も潤った。娘のエリザベスは列強との険悪な緊張関係を独特のヴァージン外交で切り抜け、一五八八年にはスペインの無敵艦隊を撃破して絶対王政を確立した。女王の死後、親戚が王位を継承したが、王権神授説を振りかざして国民を圧迫したので、清教徒・名譽の市民革命が起こり、ここに「王は君臨すれども統治せず」の世界初の立憲議会政治が誕生し、十九世紀には世界の覇者となる。

閑話休題。国立大学の再編・統合を進める一連の動きを受けて、北海道教育大学の村山学長は平成十四年五月、五分校再編の最終案を発表し、函館校には新課程を集約することとした。

母校函館校と連携を取りつつ、夕陽会は学長や関係機関に要請文を出し、結果、教員養成機能の存続に成功した。新課程設置に反対の立場を示していた函館校は、十五年八月の教授会で、「学長提案に基

本的に賛成せざるをえない」と受諾したため、九月二十六日の本部役員会で、「断腸の思いだが新課程への再編を母校が受け入れる以上、従わざるを得ない」と前安島会長が心痛を表明しつつも、後ろを振り向くことなく、直ちに新しい息吹への風穴をあける動きに着手した。

他分校同様、母校函館校とその同窓夕陽会はいま転機を迎えている。函館校は来十八年度から新課程構想に基づき、学生募集がされるし、夕陽会も会員減や市町村合併等により支部組織の再編を余儀なくされている。その転機に臨んで夕陽会は昨年十二月の本部役員会並びに十七年度総会で、新生函館校キャンパスへの支援と今後の夕陽会組織と財政の在り方を研究するワーキンググループを立ち上げた。大学・学生支援グループでは大学の地域連携と社会貢献、教員養成の支援策について、組織・財政グループは今後の会の組織拡充と財政基盤の確立について検討と研究を進めている。

また、今年四月、函館校奥田副学長と井上函館市長が「相互協力協定書」に基づき覚書で、函館圏の教育・文化・スポーツ・学術の振興に積極的に貢献する取り組みをしている。

教職会員が多数派でなくなる時代の到来が予測される。道は険しく至難であるが、公務員をはじめ民間就業同窓会員の掘り起こしを開始しなければならない。試練に立つ夕陽会がこの転機を乗り越えてこそ、明日の黎明が拓けると思う。

全国支部幹事長会議

「創造し、行動する夕陽会」のさらなる発展のために

今年度の道内支部幹事長会議は、八月二十日（土）午後三時三十分より五島軒駅前支店を会場に、本部役員二十五名、道内二十二支部の幹事長の出席で開催された。

冒頭、川島会長が挨拶の中で、この会議開始直前に駒大苫小牧高校が夏の甲子園二連覇の偉業を達成したことに触れ、郷土を愛する心は夕陽を愛する心にも通じると話された。

尾島悌介・中瀬裕義両副会長の議事進行で報告・協議が行われ、本部総会報告では、須藤幹事長より今年度の運営方針・推進事項の重点である夕陽会組織の強化や九十周年に向けた取り組みについて検討していくことが述べられた。母校関係については、会長と幹事長から、来年度から新課程になることに伴う大学の進路指導の状況の把握や、教員採用への支援、一般社会人へのバックアップの方策、在学中の学生への働きかけ等について話された。続いて、各支部の活動状況の報告

があり、「顔見知りをつくって声掛けをしたり、こちらから出かけていく出前研修をしたり、頼れる夕陽、先輩を心掛けている」「転任の後押しをすることで、夕陽を愛する後輩づくりに努めている」「時代をつないで、次の世代へ伝えるのも役職の仕事」などが話し合われた。

最後に、会長より「頼れる本部となりたい」と挨拶があり、この会を終えた。



今年度の本州支部を対象とする全国支部幹事長会議は、十一月五日（土）岩手県盛岡市にて開催された。岩手支部の総会が同会場の隣室で行われる中、青森津軽、青森西北五、青森南部、岩手、東京の五支部幹事長の参加で開催された。

始めの挨拶で、川島会長が、「昨年は青森、本年は盛岡の地で本会議を行えることは嬉しい。三年後の夕陽会九十周年には是非来函願いたい」と話された。続いて、岩手支部田面木支部長より「岩手支部会員三百五十二名を代表して歓迎いたします。同じ仲間がここにいるんだと

いうホッとした気分を大事にして、より魅力的な支部づくりに励みたい」と開催地を代表しての挨拶があった。

前青森津軽支部長である中谷副会長の進行で議事が進められた。まず、本部総会、母校・本部の動向について須藤幹事長より報告の後、各支部の活動状況について話し合った。「県職員名簿から出身校が削除されたため、会員の把握が困難になった」「土・日の行事が多く、なかなか集まらない。年末に懇親会開催予定」「卒業年順、地区別の会員名簿を作成。地区幹事の設置で、活動の活性化を図っている」などの報告があり、「教員就職率が二十％程度の現状の中、臨採教員をしながら就職活動をしている教員志望者が多くいる。どの地で活動しているのかが分かる」と支援がしやすい、「組織強化も兼ねて、民間企業に勤めている方への

「夕陽講演会」へのご案内

道南初めての民間からの校長先生

研修部長 道 幸 拓 志

(昭和46年卒)

本会では、会員の研修を目的に、講演会等を開催してまいりましたが、今年度も次のとおり「夕陽講演会」を開催することにいたしました。

道南で初めての民間人校長として、ホクレン農業総合研究所食品研究室長から、北海道大野農業高等学校長として着任されました小林久人氏を講師にお迎えし、「学校経営と営業」と題してお話しいたします。

先生には、ご講演や会議等、大変お忙しい中をお引き受けいただきました。多数のご来場をお待ちしております。

働きかけが必要。卒業生から連絡してもらえる方法はないか」「卒業時に同窓会入会式を開催するのはどうか」などの意見があった。また、東京都の新しい学校運営組織の状況なども紹介された。

その後、岩手県支部に合流させていただき総勢四十名の合同懇親会が行われた。会の中で感謝状の贈呈があり「卒業し、学友と別れ、海を越えるのはさびしいものです。ところが、百名を超す同窓生がいることを知り、『土地墾闢・人民蕃殖』の旗を我がみちのくへと始めた岩手支部です。二十年を経て、和気あいあいの夕陽会岩手支部を嬉しく思います」昭和十六年卒の前岩手支部長及川悌三郎氏の挨拶に大きな拍手が送られた。そして、同期、研究室の懐かしい話題で会場一杯に笑顔と歓声が広がり、和やかな余韻を残しながら会を閉じた。

なお、夕陽会員以外の方の参加も期待しております。ご家族はじめ、友人、知人の方々にもご紹介くださいますようお願いいたします。

平成十七年度夕陽講演会

日時／平成十八年二月四日（土）

午後一時三十分

会場／函館ハーバービューホテル

（函館市若松町十四―一）

演題／「学校経営と営業」

講師／北海道大野農業高等学校

校長 小林 久 人 氏

※入場料無料、多数ご参加ください。

申込先／函館市立弥生小学校

校長 藤 井 良 江

会務報告



幹事長
須藤 由司
(昭和52年卒)

《一般会務》

- 7・19 夕陽會報第186号を発行する。
- 夕陽指導主事等会総会に川島会長・須藤幹事長が出席する。
- 25 萩野参与(名古屋)と川島会長・上田顧問・安島顧問等が懇談する。
- 30・31 「明日の教育を考える研修会」を開催する。(函館)
- 6 「未来の教師フォーラム」を開催する。(函館)
- 12 WEB委員会を開催する。(函館)
- 15 平成17年度第一回本部役員会を開催する。(函館)
- 20 本部事務局専門部長・部員会議〈委嘱状交付〉を開催する。(函館)
- 20 道内支部幹事長会議を開催する。(函館)

- 29・31 函館校教員採用二次試験対策講座を支援する。(函館)
- 5 大学・学生支援に関する第一回ワーキンググループを開催する。
- 12 WEB委員会を開催する。(函館)
- 13 組織・財政に関する第一回ワーキンググループを開催する。
- 14 第八回夕陽美術展準備委員会に川島会長・須藤幹事長が出席する。
- 10・6 大学・学生支援に関する第二回ワーキンググループを開催する。
- 27 組織・財政に関する第二回ワーキンググループを開催する。
- 8 北海道教育功績者表彰受賞者に祝意を表す。
- 24 夕陽中央会議を開催する。(札幌)
- 24 函館市文化賞受賞者に祝意を表す。
- 11・24 高齢者叙勲受賞者に祝意を表す。
- 22 函館校奥田副学長・高田事務長等と川島会長・須藤幹事長が懇談する。(函館)
- 5 本州支部幹事長会議を開催する。(盛岡)
- 22 第八回夕陽美術展実行委員会に川島会長・須藤幹事長が出席する。(函館)
- 25 「博報賞」受賞校に祝意を表す。

受賞(章)おめでとうございます

十七年度教育功績者表彰

- 塩崎 設男 氏 昭和43年卒
- 函館市東山二の一三の一一
- 山本 俊秀 氏 昭和43年卒
- 函館市日吉町二の二二の三一

函館市文化賞表彰

- 安東 璋二 氏 昭和30年卒
- 函館市東山二の九の二三

函館市功労者表彰

- 北林 秀男 氏 昭和29年卒
- 函館市本町一七の二の六〇二

秋の高齢者叙勲表彰

- 〈瑞宝双光章〉
- 高嶋 勉 氏 昭和12年卒
- 函館市鍛冶二の一五の七

全国学校体育研究功労者表彰

- 塩崎 設男 氏 昭和43年卒
- 函館市東山二の一三の一一

博報賞

- 登別市立幌別小学校
- 校長 今村 裕昭 氏 昭和47年卒

《支部総会・同期会・個展等》

- 7・1 渡島支部松前支会総会に類家副幹事長が出席する。(松前)
- 2 東京支部総会に川島会長が出席する。(東京)
- 7 渡島支部福島支会総会に須藤幹事長が出席する。(福島)
- 15 渡島支部木古内支会総会に川島会長が出席する。(木古内)
- 23 渡島支部支会総会に須藤幹事長が出席する。(函館)
- 31 昭和38年卒同期会「淑女の会」に祝意を表す。(函館)
- 8・8 昭和39年卒同期会に川島会長が出席する。(函館)
- 9 昭和31年卒同期会に川島会長が出席する。(函館)
- 27 鶴岡会渡島支部懇親会に須藤幹事長が出席する。(函館)
- 9・17 夕陽指導主事等会懇談会に川島会長・須藤幹事長が出席する。(札幌)
- 25 昭和25年卒同期会に祝意を表す。(洞爺)
- 10・1 道北ブロック会議に川島会長・須藤幹事長が出席する。(稚内)
- 6 北二師同期会に祝意を表す。(函館)
- 6 昭和37年II類卒同期会に祝意を表す。(函館)
- 6 養護教諭特別科同窓会懇親会に祝意を表す。(函館)
- 14 六稜会創立八十周年記念式典・祝賀会に川島会長が出席する。(旭川)
- 15 昭和40年卒同期会に中瀬副会長が出席する。(札幌)
- 15 昭和30年卒同期会に祝意を表す。(函館)
- 22 北海道の詩歌と書の世界展祝賀会に川島会長が出席する。(函館)
- 24 学芸大学三十回II類卒同期会に祝意を表す。(函館)
- 11・2 昭和44年卒獅子の会懇親会に祝意を表す。(函館)
- 5 岩手支部総会に川島会長・須藤幹事長が出席する。(盛岡)
- 11 函館大学夕陽有志の会に川島会長が出席する。(函館)
- 12 夕陽バスケットボールOB会海峡クラブ総会に祝意を表す。(函館)
- 15 一陽会同期会に祝意を表す。(函館)

中村絃司先生御退職記念

謝恩会のお知らせ

(兼 数学科同窓会・役員会)

日時/平成十八年一月十四日(土)

午後六時(役員会は五時三十分)

会場/ロイヤル柏木

函館市柏木町一三三六

☎〇一三八(五)二二二一

会費/五千五百円

(記念品代は別途二千元を振込)

私たちの恩師であります先生が、本年度をもって御退職なされます。

つきましては先生を囲んで、思い出に残る楽しい会にと考えております。

なお、数学科同窓会として、ご案内を
・昭和四十六年度以降の同窓生全員
・昭和四十五年以前の同窓生は函館、
渡島在住の方々

に差し上げておりますが、郵送漏れ等
がありましたら次のところにご連絡を
お願いいたします。

申込先/附属小学校 類家 直人

☎〇一三八(四六)二二三五



教え子「高見盛」を語る 3

奇跡を遙かに通り越して

高橋 宏 彰

(昭和59年卒 五所川原市立金木小学校)

大学四年生の土壇場で天皇杯(アマチュア横綱)を手にした彼は、大相撲へ大きく舵を切るようになってしまった。

田宮(琴光喜)、高濱(濱錦)と日大の同期三人で並ぶその頃のスポーツ紙をネットで見る事が出来るが、紙面から期待されているのは田宮だけであり、水戸黄門に例えるならば、彼も高濱もせいぜい助さん格さん程度の扱いである。でもまあそれが妥当な線だないと、ブレイクした今になっても納得させられる。

彼が東関部屋に入門できたことも幸運であった。幕下付け出しの資格でプロの土俵を踏んだ彼は勝ち星を重ねて、五場所で十両昇進を果たす。師匠の東関親方(元関脇高見山)の指導方針や、胸を貸してくれる優しい兄弟子(現役横綱曙)など多くの条件に恵まれたとはいえ、周囲も驚くようなスピード出世だった。

昇進とともに四股名が『高見盛』と決まったという報道を目にして、日本酒の名前か?しかも字余りだし唱えにくいなあ、せめて四股名だけでもまともなものを付けてやってくれればいいのに、当時はものすごく残念で堪らなかった。

大相撲を志した者にとって十両(給料が貰える)になった時が一番嬉しかったと誰もが異口同音に話す。不覚にもこのころ就職おめでとうという短い手紙を書いたような記憶がある。昔の自分の行動(彼を相撲部に無理矢理放り込んだ事)に対する責任を果たしたという安堵感が

そうさせたのかも知れない。

彼は十両を三場所を通り過ぎ、新入幕の場所で敢闘賞を獲得、まさに順風満帆であった。だけど、好事魔多しとはよく言ったもので、次の場所でもそれも同郷の若の里戦で右膝十字靭帯断裂の大怪我をし、長いリハビリ生活を余儀なくされる。

平成十三年は私にとっては忘れられない年である。三回目の転勤により現任校に赴任。大きな学校の中で慣れない仕事(初任研指導教員・スクールバスの配車調整)や部活動(女子ソフトボール部・全国大会出場)に忙殺された。帯状疱疹で十日間の絶対安静を余儀なくされたり、主催地区代表として視聴覚情報教育の県大会を運営したり、その合間を縫って「夕陽会青函ライダーカップ大会」を実現させたりもした。その他にも多々あり、大相撲への関心が最も薄れていた。

翌年の一月に板柳時代の教え子の結婚披露宴があり、会場には板柳町の関係者の懐かしい顔も集まっていた。中には携帯ラジオを持参してそわそわしている人までいた。私はその空気を読めずにいたのだが、その時に入ってきたのが彼の十両優勝のニュースであった。幕下に転落し、歯を食いしばってリハビリや稽古に励んだ末の結果であろうが、それすら知らなかった。ただ十両優勝なので過去のサプライズのような驚きはなかった。

その年の夏休みに入ってまもなくTB Sの高岡さんと名乗る方から電話が入っ

た。電話番号は彼のお母さんに直接聞いたという。そんな事情なので無下にもできず『筑紫哲也NEWS23』の取材に応じることにした。乞われて板柳の居酒屋へ行くと彼を中心に十人程の教え子(既におっさんに近い)が集まっていた、何となく白けた空気が漂っていた。カメラが二台据えられ、照明も眩しい、そんな中で対面し、ぎこちない師弟の会話が

始まった。私の小脇からプロデューサーが「先生との一番の思い出は何?」のように小声で質問し、彼がボソボソと答えた。彼はカプトムシを捕りに行ったこと、と答えたので私は意外に感じた。話がクツパ大王の事に及ぶと、ようやく動員された同級生たちも大爆笑し、カメラさえ回っていないければ、その子ども達とも話せるのにと、もどかしさを感じていた。

携帯電話が錯綜し最終的に教え子が二十人程に増え、二時間後にテレビ局のクルーが帰ってからの本番のクラス会のようなだった。そうなると思議なもので、友達の輪から少し離れる昔の序列のような雰囲気が見え隠れしてしまい、私はその日の主役に相手を遣った。その後も宴は続いたが、収録中も含めて最後まで、休む間もなく湯水のようにビールを飲み、出てくる肴を次々と平らげるのを目の当たりにして、減量を必要としない職業に就くことが出来て本当に良かったなど、改めて確認した。収録の次の場所に小結へ昇進。これでいつ辞めても元小結高見盛と箔がついて呼ばれるぞと、どうもネガティブだが素直に嬉しかった。

それを機に、『週刊女性』『真相報道バングシャ』『ベストタイム』『ZONE』『朝日新聞』『高見盛の単行本』などの取材が矢継ぎ早に詰めかけてきた。

学生時代から新採用の頃にかけて、自称クイズの帝王として、『スーパーダイスQ』『クイズタイムショック』『日本列島縦断クイズ』等への出演経験はあるが(冷汗)、彼の番組への出演の方が多くなっていた。さらにその取材の内容であるが、例の給食の一件や、彼の人気のきっかけとなった気合いを入れるパフォーマンスについてなら分かる。彼が四年生の時にどんな子どもであったかとか、成績はどうだったか、とかでもまだ許せる。休み時間に何を遊んでいたかとか、どんな献立が好きであったか、そんな事まで覚えている訳がないだろう、と叫びたい気持ちもぐっと抑えた。二十年前の教え子一人一人の嗜好なんかを、今でも記憶している方が居られますか?

そして庄巻は『フジテレビ・高見盛の特番』で、レポーターの東海林のり子さんが金木小学校にやってきた時である。ちようど長い休み時間に到着されたので、子ども達は握手を求め、マニアの同僚もサインを求め、職員室の周辺が興奮の渦と化していた。どうせフジテレビは入らない(津軽では放送されない)ので、創らずに何でも好き放題に語ってやった。録画され後日放映されると分かった時には相当焦ったが、やばい部分がカットされていたので何とか助かった。

テレビのインタビューを受けるに当たって、完全無欠の流暢な共通語で話そうか、普段通りのネイティブな津軽弁を使うのか、私の中には葛藤がある。TVのスタッフが分かるよ大丈夫だよと言うので、悩んだ末に丁寧な津軽弁を選択している。大丈夫の言質は何処へ行ったのか、放映される度に必ず字幕が入るのには凹んでしまった。(許せ石松、続く)

同期会だより

「獅子の会」還暦前年

中村 紀久雄
(昭和44年卒)



【青春の息吹】

獅子の会懇親会において、学生歌「若い樹」を歌っていると、我が青春の息吹がよみがえる。

母校創立五〇周年記念に募集され、昭和三九年に入選した歌なので、翌年の昭和四〇年入学の学生に取り立てて指導された記憶がある。とりわけ、三番の歌詞が印象深い。

「時代の波浪の荒れ狂い
思想のあらしすぎぶとき
眞実の鐘を鳴らさんか」

当時の大学は、全学連が組織され、ベトナム戦争に反対したり、昭和三五年日米安全保障条約改正をめぐる反対運動を展開していた。更に、在学と重なる昭和四三〜四四年には、東大安田講堂の学生による占拠に象徴されるように、多くの国公立大学や、私立大学は全学バリケード封鎖をはじめ、何らかの闘争状態・紛争状態にあった。本学も例外ではなく、時代の波浪が奔流となり、思想の嵐がささぶ世相であった。そうした状況で「眞実の鐘を鳴らさんか」の歌詞が、鮮烈な印象を与えてくれたことを思い出す。

一方、昭和四一年四月「国立学校設置法の一部を改正する法律」により母校は、北海道学芸大学から北海道教育大学函館

分校と名称を変更した。私たちの二年生の時のことである。歴史的建造物、木造の二階建ての思いのこもる旧校舎と別れ、自然科学館竣工から始まったと思うが、

人文学管理棟等新校舎が完成し、新しいにおいする建物で後半二年間を過ごす新鮮さが加わった。

【回想】

授業料は、一年間で一万二千元。それを前後期に分けて、それぞれ六千円の納入額だった。滞納すると、氏名が掲示されるのだが、恥ずかしいこともあった。多くは市内の通学生だったが、市外からの学生の中には、教育特別奨学生として、貸与月額八千円の奨学金をいただき、学業と家庭教師のアルバイトを両立させ、自活が可能になり、育英会の事業の存在意義の大きさを実感した。

また、各教官の方々の気遣いがあり、各研究室において、それぞれの交流がなされていた。私たちは、他研究室とソフトボールの交流試合をしたり、清川にある戸切地陣屋へ桜の花見に行ったり、教官宅を恒例の正月訪問したり、追い出しコンパなど。教官の家族とともに、先輩・後輩を交え、楽しいひと時を過ごしたことが、懐かしく思い出される。

「獅子の会と命名の由来」
当時の教育施策の影響を受けて、同期生は、根室・宗谷・十勝などの全道各地、それも多くはへき地校勤務、また、遠くは、東京都・神奈川県・千葉県などの任地に赴き、多くは、函館を離れた。それから、幾星霜を重ね、昭和五〇年代になると、それぞれの任地で教育に情熱を傾けるとともに、力量を高め、故郷、渡島管内に勤務する同期生が増えてきた。それをきっかけとし、同期会開催の機運が高まってきた。

おぼろげな記憶をたどると、同期会準備会は上田氏、谷村氏とで、大門にあったソーダファンテンカメイで打合せをした。第一回は男子ばかりだったが、和やかに旧交を温め、懇親を深めた。その席で、昭和五五年に放映された、近代国家の礎を築こうと奔走する主人公に光を当てた、大河ドラマ「獅子の時代」の精神にあやかり、強くたくましく生きる願いを抱き、「獅子(四四)の会」と命名された。三〇歳代のころである。

【還暦前年】

平成一七年一月二日第一三回を五稜郭にて開催した。伊藤氏の名司会、今回遠来の多胡氏による乾杯、入学代表挨拶の金崎氏のお開きの乾杯と進行し、年金の話題から始まり、過去から現在への時空間をうづめる話題が尽きず、温かな交流により、穏やかな空気が流れ、楽しいひと時を過ごすことができた。

私たちは、学生時代、進路決定時、現在の急速な教育改革期など、変動の多い時代を生きているように思う。

「人生の目的」(五木寛之著)の一節に、「人が生きるといふことは、思うに

まかせぬこと」とある。そうした人生、三十有余年を必死で駆けつけた私たちも還暦前年を迎えた。

無念であったろう二〇歳代での物故を含めて、六名の仲間と別離したが、来年は、多数の同期が集い、一層の旧交を温め、元氣な獅子たちであり続けたいと思うこのごろである。

平成一八年六月一六日(金)本部懇親会の前日に、第一四回「獅子の会」を開催すべく幹事予定者一同張り切っている。全国に在る同輩諸氏が大同に集うことを大いに期して。

「北の大地に われら今
高らかに歌わん ああ 母なる生命
夕陽とこしえに 夕陽とこしえに」



支部の歴史をふりかえって

巴の海の潮風かおる

―八十七年前 函館市支部の源流―



函館市支部長 伊藤 皓嗣

我が夕陽会は大正七年三月に設立され、そのおひざ元でもある函館市支部は大黒柱としての自覚と貢献を至上とし、全国三十一支部の先頭に立って事業の推進に努めている。

巴湾に吹きつける潮風のごとく、たくましく歩んできた道のりを『支部会報』に沿ってふりかえる。

◎支部のおこり

第一回卒業生 吉村庄治氏が『夕陽函館支部会報第17号』に寄せた「夕陽会函館支部誕生記」によると、函館支部は次のようなエピソードによって始まる。

「北海道函館師範学校の第一回卒業生六十八名が大正七年三月に巣立った。函館区内在住者は七名で、この年の暮れに母校校長を交え卒業生が湯の川の料亭で会費二円五十銭の忘年会を催した」

これが、函館区在住の初めての同期会であり、実質的な函館師範学校同窓会の発足である。

翌年六月三日の母校開校記念式典に在函の同窓生が招待され、その夜、母校校長を迎えて懇親会が開かれている。

「この会合で同窓会本部の会務・会計状況が報告され、第二回卒業生 庄内武治氏に地方会員からの会費と基金あわせて二円二十銭の徴収を依頼した」

この会が同窓会本部の総会でもあり、

（昭和44年卒 函館市立あさひ小学校長）

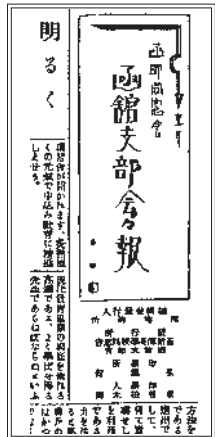
函館支部会でもあったが、会則や会費のきまりはまだなかったとのことである。

「大正十二年には会員が三十名になり、各校幹事を定め、本部の会費徴収や会合の連絡をとるようになった」

その年の秋、第一回卒業生 安田吉助氏を初代支部長に選任し、支部会則を決めて、正式に函館支部として発足した。

◎函師同窓会 函館支部会々報から

創刊号は現存せず、第二号は当時の尾崎清治幹事長が編集兼発行人となり、【函館師範学校同窓会函館支部会】から【函師同窓会 函館支部会々報】として昭和六年七月二十二日に発行されている。



「教育の実際化として職業教育を如何に取扱うべきか―弥生小学校長 藤澤誠太」

「教育の郷土化の一考察―函館師範学校教諭 松田金五郎」など、卒業生だけでなく、大学と一体となった内容となっている。さらに、講習案内、研究欄

があり、各校通信では幸校・大森校・谷地頭校・函館女子校・谷川校・第二附属校などの懐かしい校名が並んでいる。

第三号は昭和六年十月に発行。「井の中の蛙大海を知らず」幹事長 尾崎清治は、大日本体育学会への参加報告。研究欄、講習会報告、学校通信が続く。また、函師同窓函館支部会総会並に懇親会を駅前ステーションホテルで開催する案内が掲載されている。

第五号は昭和七年七月に発行。「生活態度訓陶の一面―函館師範学校 山川鐵三郎」

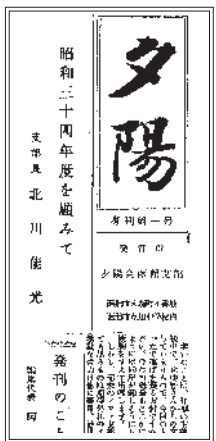
「朝体実施について―住吉校 加藤義雄」と教育活動に対する情熱がほとばしる内容が紙面をおおっている。さらに、実際研究（図書・綴方）、文芸（短歌）、学校通信と続き、編集後記には「九月の第六号発行には多数のご寄稿を」と呼びかけており、これらの会報は夕陽記念館に保存されている。

戦前は紙質のりっぱな写真版まで入った素晴らしいもので、特に会員の研究を掲載して職能向上を目指した会報であった。各校に勤めている同窓の写真アルバムを、支部の事業として作成したこともあったという。その後の保存はなく、非常に残念なことである。

昭和十八年四月、北海道第二師範学校への校名変更にもない、【函館師範学校同窓会】は「夕陽会」と名称を変えた。

◎夕陽 復刊函館支部会報から

昭和三十四年12月15日、「夕陽会函館支部」から『夕陽 函館支部会報』



復刊第一号が発行された。「いよいよ復刊第一号が発行の運びとなったことは、まことに喜ばしいことです。よく地方支部から函館支部のことを本部本部といわれています。これは母校の地元であるからで、本部も函館支部も一体と考えられることは当然とも思いますが、それだけ市支部の動向が敏感に反映するものと思います」

（夕陽復刊第一号 復刊第一号によせて 夕陽会会長 加茂勝衛氏寄稿）

支部会員の道会議員、市会議員当選の報告もあり、政治の分野での活動も見え。また、年額二百円の本部会費に二百四十円の支部会費と記載されている。

◎夕陽 函館市支部会報から



平成九年、「夕陽会函館市支部」への名称変更にもなう『夕陽 函館市支部会報』は、復刊第一号が発行されて以来六十八号、支部長は二十八代を数える。現在、本部にならって採り入れた前納制度による会員は六百六十一名・年会費会員は六十九名・現職会員は八百六十一名。わずか十年前の支部会員数が二千人を越えていたことを考えると感慨深い。

「海」を基盤として結ばれた新「函館市」。新幹線の北海道大陸に向け、夢と希望が躍動する。豊かな幸をもたらす巴の海と函館市民のために、創造の気概と伝統の息吹を送り続ける夕陽会。数多くの先輩が築き上げてきた精神を大切に受け継いでいきたいと考えている。



後志支部便り ～新たな課題に挑戦～

後志支部長 小寺 憲 雄

(昭和44年卒 余市町立沢町小学校長)

後志管内は一市十九町村で構成されているが、大別すると「小樽市」と「郡部」ということとなります。支部組織も小樽市が単独であり、残りの郡部をまとめて当支部となっています。

「郡部」は、一般的に四ブロックに分けられ、「北後志」「南後志」はもちろん位置によりますが、「岩宇（岩内郡と古宇郡）」そして「山麓（羊蹄山の麓）」ということになります。以前は町村単位の活動も充実していたのですが、最近では、会員数の減少により身近な近隣町村やブロックでの取り組みや交流を重要視しています。

ブロック内での研修会や交流会を奨励して会員相互の親睦や教育問題についての学習などを行い、時にはレクリエーションを取り入れたり、会報を発行するなど新しい活動も生まれています。

また、本支部内には、「新進会（三五才以下）」・「振起会（四五才以下）」・「臥牛会（四六才以上）」という年代別の会を組織して学習活動の充実や懇親を深めているところです。

通常は、五月に年度の総会と「歓迎会」を設定して活動の方針や役員体制を整えて、翌年一月には、臨時総会と「勇退者感謝の会」を開催して、管内全体の会員やOB会員がこぞって集い、交流を深め

ています。

小樽市を除く後志管内の教員に占める夕陽会員の割合は、一般教員一〇一名、教頭二四名、校長二七名で、それぞれ一六%、三二%、三五%にあたり、とりわけ管理職や中高年齢層が多くて、年齢構成上では、間ちがいなく逆三角形（逆ピラミッド型）になっています。

この地域では、更に少子高齢化や過疎化が進行しており、学校の統廃合も絶えず間なく行われています。そのため、新採用教員も年々減り続けて、今年も、夕陽会員がたった一名だけの採用ということになってしまいました。将来的にも増える要素のない厳しい現実にあります。

現職会員の減少に反比例するように年々ともOB会員が増え、総会などの案内状の発送経費がかかって次第に本支部の会計を圧迫するようになってきています。支部組織を維持しながらOB会員とのつながりを保つていくために、是非とも解決をしていかなければならないことの一つでもあります。

会員の帰属意識の変化や会費の未納会員の増加など解決困難な問題や課題を抱えながらも、現職会員の創意や知恵を求め、少しずつ同窓のつながりを強める活動の充実・発展をさせていかなければならない決意で取り組んでいます。



岩手支部便り

岩手支部長 田面木 茂 樹

(昭和48年卒 水沢市立東水沢中学校長)

この度、岩手支部長の重任を引き受けることになりました。

岩手支部の創設は昭和五十九年に、前支部長でありました、及川梯三郎先生が中心となり発足しました。以後、二十年間の長い間、支部発展にご尽力頂きました。

昨年度は、支部創設二十周年を記念し支部総会を函館で開催するなど、支部の活躍は及川前会長の強いリーダーシップによるものです。その後を受け、会員をリード出来るか心配ですが、微力ながら力を尽くす所存であります。

岩手支部会員は、退職、現役会員は三五二名です。その中に校長四名、教頭二名、教育行政関係五名、幼稚園長等で活躍されている会員もいます。

岩手においても教員採用が毎年減少し、教職を目指している方々が本採用になれず、教職会員が増えない状況になっています。

今年度の支部総会を十一月五日に盛岡で開催しました。その中で、支部発展のために、会員相互の交流はもちろん、新入会員の紹介や同期会等を支部総会で企画して、魅力のある支部にしようとの話し合いもなされました。

当日は、全国支部幹事長会議も同時に開催され、本部から川島会長様、中谷副会長（青森）様、須藤幹事長様等多くの

本部役員の方々を迎え、一緒の懇親会が開かれ、岩手支部の会員にとっては、本部の情報や全国の情報、そして、同期の情報交換することができ和やかな会となり、遅くまで交流がなされました。

- 岩手支部では、主な事業としては
- 一 本部とのつながりを深くする。
 - 二 会員の親睦交流と研修を行う。
 - 三 集会の地域開催（ローテーション）実施。

であります。

特に、支部集会を広い岩手で開催するにあたり、地域ローテーション方式で行っていることが本支部の特色であり継続していきたいものと考えています。また、会員の親睦を図るためにミニ集会や地区交流会等を各地区で開催し、相互交流を深めていこうとの話し合いがなされました。各地区の幹事が中心となった集会が行われることを期待しています。

私は、卒業後、埼玉で教職をスタートし、その後岩手に戻り三十数年になりました。函館で学んだ事を、地元に戻り「夕陽会」の仲間と共に頑張っています。及川梯三郎先生が長い間、支部長として同窓を愛し情熱を持って支部発展に寄与された後を受け、更に「創造し行動する夕陽会」を充実・発展させるため会員三五二名と一緒に岩手支部を盛り上げていきます。

支部だより



夕陽バスケットボールOB会 海峽クラブ

会長 瀧本剛夫 (昭和36年卒)

平成元年六月二十四日、我々の永年来の強い願望であったバスケットボールOB会「海峽クラブ」の設立総会が行われました。北海道函館師範学校に始まり、その後、北海道第二師範学校、北海道学芸大学函館分校、北海道教育大学函館分校、そして現在の北海道教育大学函館校に至る母校のバスケットボール部のOBを網羅した組織として新しい出発をしたわけです。

それまでは、バスケットボールチーム「海峽クラブ」として、母校OBを中心とした函館地区の強豪チームとして活躍していました。今回の設立にあたっては、黒丸宗太郎氏(昭和十四年卒)をはじめとし、阿部政志氏(昭和十九年卒)、故高嶋勇三氏(昭二十年卒)が中心となって、さらに各年代のOBの方々とも相談しながら組織化検討委員会を重ねて、会則、趣意書の検討、役員・事務局の構成等が具体的に決定されていきました。

母校のバスケットボール部の歴史を振り返ると、記録として残っているのは、当時の籠球部に関する記事としては、昭和五年度から昭和十八年度までの十四年間で、それ以降の部活動は太平洋戦争中の空白時代となり、その復活は終戦後を待たなければなりません。しかし、函館師範籠球部の強さはすばらしいものがあり、函館地区の大会はもちろん、全道大会の優勝も数多く、とりわけ昭和十二年、十三年、二十二年と三度も「全国大会準優勝」というすばらしい功績を残

しています。まさに全国のバスケットボール関係者に「函館師範ここにあり」を強烈に示してきています。ここに、創立当時の函館師範学校校友会誌「白一線」から籠球部に関する記事より作成された「籠球部編(現代かなづかいに改訂)」の一部を紹介いたします。

【昭和五年度 第四十七号】

昨日の戦いより、明日の戦いへ。
歴史ある我が運動部に、先輩諸兄の熱心な活動や理解ある先生の御尽力に依り、多年の宿望も叶って我が部も加えて戴く事になりました。

小さき選手が母校を思い、部の創業を考え、函師スピリットを土台として立つのだ。そして栄光に輝く歴史を創るのだ。例えば去年炎熱の夏、砂塵の中での涙の練習も水泡に帰し、札幌遠征不可となるやその落胆いかばかりであったろう。しかし、若き運動家の涙の中にも矢張飛躍があった。

雌伏一年、我々にもまた春が訪れてきた。五月、五年諸兄の関西旅行中に於ける対京都師・対奈良師・対青山師の試合に好成績を挙げて帰函してより、『今年こそは』と云う意気が一層我々の頭に刻み込まれた。

それからの練習は実に物凄いものがあった。我々は奮闘努力して立派な部を組織しようとしている。願わくは校友諸君、この新生の籠球部に鞭撻と同情とを与えられんことを。

昭和5年度 函師籠球部創立の基礎を築いた大先輩



中橋 滝沢 小川 橋本 宮川 菊間 中村 香川 今 濱谷 諸留 浪岡

バスケットボール部創設時代の部報であります。大先輩の志の高さと気迫に驚かされるものがありました。こうした往年の栄光ある伝統をもつ我バスケットボール部OB会が、南部秀雄氏(昭十年卒)を初代会長として、平成のスタートと共に夕陽バスケットボールOB会「海峽クラブ」として新たな歩みを始めたことは大変意義深いことでした。南部秀雄氏は、これを機に、道内は勿論のこと全国に居る「海峽クラブ」の仲間が、バスケットボールを通しての強い団結意欲を組織に結集して、会の進展と広くバスケットボールの普及発展に貢献していきたくと力強く語っておられました。以後、故高嶋勇三氏、さらに今野久男氏(昭和三十年卒)とすばらしい先輩に会長を務めていただき、着実に歩みを進めてきております。

さらに、母校の長い歴史の中では、籠球部育ての親と慕われた中村末雄先生をはじめ、中村幹夫先生、川上幸三先生、秋岡英承先生といった、指導力豊かでご理解ある顧問の教官が、熱心にご指導をしてくださり、夕陽バスケットボール部の発展に多大なるご尽力をいただきました。我々会員にとつて、誠にありがたく、心強い限りで感謝に堪えません。

今年度は、去る十一月十二日に「海峽クラブ総会及び懇親会」を行いました。現役学生を含めて、函館近郊はもとより道内各地より五十名に近い会員が集い、旧交を温めながら本会のさらなる充実と発展に向けて貴重な話し合いを進めました。教育大学の再編に伴う後輩会員の動向、バスケットボールの普及発展に向けた協力体制など、解決すべき課題も多くありますが、会員一同がバスケットボールを通して培った情熱と絆を大切にしながらさらに結束を固め、夕陽バスケットボールOB会「海峽クラブ」の充実・発展に向けて努力してまいりたいと考えております。



平成17年度 海峽クラブ総会・懇親会
平成17年11月12日 於:フィットネスホテル330函館

社会に活躍する同窓



あの頃から、さまざまっていた

舞踊家 清水 フミヒト
(平成元年卒)

学生時代を振り返るとさまよっていたのかも知れない。とにかく多くの人に会いたかった。ぼくがまだ経験していない、いろんな話を聞きたくて、そしていろんな経験をしたい。多くの人、振付家やダンサーと出会い、まだ何も形にない未知を人々と創造していく舞踊家(ぶよるか)という仕事。この未知なる未完成が観客の心に手渡しで伝えられる方法を演出し、完成を試みる。未だ、未完成を味わい続けている。

時は、一九八五年。初めての世界一の夜景。目を閉じ、先輩に手を引かれて見た、函館の人々のともし火、そして、漁り火までもが、まるで、輝かしい未来を夢見させてくれるほどの感激だった。恐いものは何も無かった。大学時代は、学業より昼は塾の講師、夜はカラオケパブでアルバイト。体育科でありながら高校から続いていた器械体操部もすぐにやめて、飲んで遊んだ。本当によく遊びよく飲んだ。一年の夏、当時筑波大学の教授をされていた川口千代先生の指導の下、四日間のダンスの集中授業を受けた。体育科の仲間とその時も朝まで飲んでそのままダンス。「この体育館は、お酒くさいわ。」と先生にご迷惑をおかけしてしまいました。皆、自然に声が出て、

体を動かした。まるで子供のようにはずかしさも素直に踊った。発想を生かしてくれた。最高にうれしかった。「集う喜び、見つめ合い、生みだし、つくる楽しさ。」大切なことを教えてくださった。踊りに体が目覚めた瞬間だった。その秋、第四回函教大モダンダンスクラブ発表会の舞台に有志として、スポットライトの中にいた。踊りに体が目覚めた瞬間だったのに一瞬の目覚めは長く続かず、再びよく遊びよく飲んだ。

そんな生活のまま、附属中学校の須藤由司先生の熱いご指導の下、劣等生なゆえにご迷惑をおかけしながら、三年の教育実習がはじまった。やはり「遊びすぎ」が、人生の分かれ道を生み出す。生徒から「先生」と言われた時、自己に対する不自信が胸を圧迫した。僕は、先生といわれる資格、指導する能力も、何もなかった。今まで、自分のやりたいことしかやってなかったから。教師になることを、やるべき決断をした教育実習だった。高校の体育の先生になることが、僕の小さい時からの大きな夢だった。だから教育大、そして、器械体操の指導を佐藤徹先生に仰ぎたく函館校に決断したはずなのに、自らの夢の光を消していった。まずは、自分の心に懐中電灯をあててみた。ぼつ

んとダンスがありました。磨いてみたくなった。四年のときは、自ら立候補し部長を志願、モダンダンスクラブ(MDC)漬けが始まり、まさか今もなおダンス漬けの人生になるとは……。

卒業後は、上京しダンスの濃い現場に身を埋めた。レッスンとバイト漬けの日々。翌年から、第七回MDC発表会から「おまえに何が指導できるんだ!」と師匠の正しい判断に逆らい、コーチをはじめた。何も無いのは、本人が一番知っている。教師をあきらめたはずなのに、必死にダンスの指導をしていた。現在コーチ十七年目。そして、光栄なことにも非常勤講師として学生時代に受けたダンス授業を担当し、一般の学生も、指導している。

MDCは、活動の幅を広げ、函館近郊のお祭りやイベント、そして、ダンスの甲子園神戸のダンスフェスティバルに参加するようになる。コンクールでは、特別賞もいた、だき、いよいよ全国区かと期待する。そして、今年二十二回目の発表会を迎える。その時々の学生達の生み出す未知への希望と若さゆえの焦りや不安。そして信じる力が創り出す作品の数々。生む苦しみ、相手にイメージを伝達する難しさを、自らが体験していく現場。正解のない「未知へ踏み込む勇氣。」自由を通るからこそ味わえるホンの一瞬の自由。「伝わった喜び。」そしてここに、かけがえのない笑顔が現われる。第二十二回MDC発表会は、部員、OG・OBのみならず、ダンスを選択した学生達も自らの作品を市民会館大ホールで発表する。世界に今しか、ここにしかない瞬間を一〇〇人近い人々と創作する。ダンスは、過去と未来をミックスして、凝縮された「今」という瞬間の連続であるとい



うこと。肉体も相手にも今の瞬間に伝えることが一番身に染み込み、心に刻まれていく。瞬間の創造は本気を生み出す。

舞踊家としての今の夢は、音楽家、建築家、絵や彫刻、様々な融合の中で、その土地の人々と共に作品作りも続けていきたい。新たな未知を開拓していく心が、まるで函館の夜景のように瞬いていた。

つい最近、今僕の住む東京にも夕陽会東京支部があることを知りました。勇気がわきました。あの時と変わらない夕日。いつまでも変わらずあり続けてほしい心と明日への希望を願う。函館は、守り続ける伝統と育んでいく新たな文化が融合していく。函館校は、その拠点として地域とともにますます発展していくことを願っております。

追伸、十二月ババになります(うれい)。

清水フミヒトプロフィール

清水典人、1967年生まれ。現在は東京在住。北海道教育大学函館校に進学。北海道教育大学函館校モダンダンスクラブの発表会の舞台に立ち、ダンスに出会う。卒業後は上京し、モダンダンサーの河野潤に師事。2002年から毎年行っている自主公演の「ハートフルダンスシリーズ」が今年で4回目を迎えた。今年、2005年に函館の金森ホールで開催された。
<http://www.shimichan.com/>

受賞歴

1999年第33回埼玉全国舞踊コンクール第1位
橘秋子賞・埼玉県知事賞・社団法人現代舞踊協会
2001年第58回東京新聞主催全国舞踊コンクール現代舞踊第1部第1位 文部科学大臣賞・東京都知事賞・平岡斗南夫賞・社団法人現代舞踊協会賞



函館校の国際交流について

国際交流委員長 福田 薫

ご承知のように、平成十八年度四月より函館校において「人間地域科学課程」がスタートします。この課程には五つの

専攻が設置される予定ですが、新しい教育課程の目的は、幅広い教養と深い専門的知識を備え、実践的問題解決能力を通して地域社会の発展に貢献できる人材を育成することです。現在、新課程の開設に向けた体制づくりが多方面で急ピッチで進捗しつつあります。このような状況の中で、函館校における国際交流事業を活発に推し進める意義はますます大きく、国際交流委員会がこれまでも増して重要な役割を果たすことが期待されています。

現在函館校は海外にある三つの大学と交流協定を結んでいます。すなわち、カナダのセントメリーズ大学、オーストラリアのシドニー工科大学、中国の山東師範大学です。このほかにカナダのカルガリー大学とは北海道教育大学として交流協定を結んでいます。これらの大学とは、

母校は今②

教員や学生の相互派遣などを通して交流を進めています。具体的には、教員派遣（三ヶ月間）プログラム二件、短期研修（四〜八週間）プログラム四件、短期留学（七ヶ月〜十一ヶ月間）プログラム六件を毎年実施しています。平成五年以降の学生派遣と受け入れ数の推移表が示すように、協定校と持続的に継続的に交流実績を積み重ねてきました。

年度	派遣	受入
平成5年	25	3
平成6年	25	3
平成7年	29	4
平成8年	28	4
平成9年	24	6
平成10年	14	8
平成11年	16	7
平成12年	9	8
平成13年	17	8
平成14年	15	7
平成15年	11	10
平成16年	16	8
平成17年	12	9

国際交流委員会は、姉妹提携校との交流に関わって互恵の原則に基づき各種の事業を計画し実施しています。学生の派遣については派遣学生の募集や選考はもちろん、留学説明会、語学力試験の実施、留学準備ガイダンス、報告書作成など事前後の支援と指導を行っています。また、協定校をはじめ海外からの留学生の受け入れに関しては、留学生等日本語・日本文化特別プログラムの計画と実施をはじめ、指導担任やチュータ学生の手配、宿舎の手配、留学生室の学習環境の整備、奨学金申請支援、留学生歓迎会などを実施しています。このような業務活動は一部尚学会からの財政的援助を受けており、感謝申し上げます。

平成十七年十月、中国の天津外国語大学との間で交流協定が調印されました。これは函館校への留学が縁となつて実現したもので、過去に蒔いた種が花開いた形です。新課程のスタートの時期に新たな姉妹校が一つ増えたことは大きな喜びです。最大級の規模（学生五名の一年間相互派遣および教員一名の一年間相互派遣）での交流が予定されています。正直に言えば、派遣受入ともに不安要素がないわけではありませんが、先方との連携、校内の体制の構築、地域との連携を図って、新時代の幕開けにふさわしい特色ある交流を目指しています。

国際交流事業のいっそうの発展充実を考えると必要なのは三つ、知恵とお金と協調であると思います。函館校には過去二十年近くにわたる先輩たちからのノウハウが蓄積されていますが、近年はかなり抑制的な財政的枠組みの中の事業活動を余儀なくされています。今後積極的な国際交流事業の展開を構想するにあたり、以前に地域の皆様から寄せられた国際交流基金一億円の原資の有効な使途について、大学として本格的な検討を始める時期にあると感じています。最後に、私たちの事業活動は多くの方からのご理解とご協力を得てはじめて成り立ちます。したがって私たちの活動を広報誌やWEBなどを通して広報したり、地域の関係団体と交流連携を深めることもっとも重要な活動のひとつです。この意味で、今回「夕陽会報」に近況を報告する機会をいただいたことにお礼申し上げますとともに、私たちの事業活動に対するご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

ワッショイはこだてへの参加

北海道教育大学評議員 杉浦清志

函館校は函館港まつりの呼び物であるワッショイはこだてに、大学と附属学校園の総力を挙げてほぼ毎年参加しています。これまでに二度の団結賞を受賞し、二〇〇四年には堀川・五稜郭コース第二部サマーカーニバルの部で準優勝を獲得しました。今年は残念ながら入賞は出来ませんでした。今年も学生五三〇名、附属学校の児童・生徒・父母一三〇名、大学と附属の教職員四〇名合わせて六九〇名と、参加人数はこれまでで最高。法被が足りず夕陽会から急遽お借りする事態になりました。八月三日当日は雨の予報で、一時は本格的な降りにもなり危ぶまれましたが、五時半頃からのパレードの間は何とか雨も上がり、堀川広路から五稜郭の道新前まで、オレンジレンジの「お願い！セニョリータ」に合わせて、踊り子全員が元気づく行進しました。



「第八回夕陽美術展」のお知らせ

文化部長 大川 富美男
(昭和45年卒)

夕陽会文化事業の一つ「夕陽美術展」も八回目を迎えます。会員の文化活動の推進、会員意識の高揚、連帯感の強化を図る美術展です。会員の皆様、ご支援ご協力をよろしくお願ひ申し上げます。

一、会 期 平成十八年六月十三日(火)～十八日(日)

二、会 場 函館市芸術ホールギャラリー

三、出品依頼の範囲

夕陽会会員・母校教官
大学院生(今回展より)

四、募集作品

・出品数 一人 一点

・領域 絵画・版画・彫刻・工芸・デザイン

・大きさ 絵画は100号以内、彫刻・工芸は小品を希望いたします。

五、経 費 出品料無料

※ただし、額装、搬入、搬出の費用は自己負担となります。

搬出については、実行委員会が責任をもって、送料着払いで返送します。

六、申込締切 平成十八年二月十日(金)

七、申込先並びに問い合わせ

〒041-0821 函館市本通二丁目五十六番七号

函館市本通中学校内 横岸澤英二 気付

夕陽美術展事務局

☎〇一三八(五五)三二四一

八、作品搬入

出品希望者決定後、再度連絡申し上げます。



夕陽会会員名簿の作成に当たって

組織部長 土谷 敬
(昭和54年卒)

平成十八年度は、隔年で発行している夕陽会会員名簿の作成の年を迎えます。新課程による学生募集の初年度として、新旧の会員が臙脂色の会旗のもとで結ばれた同窓の絆をいずこの地でも確かめられるものとして、会員名簿のもつ意義をますます確かなものにしたものです。

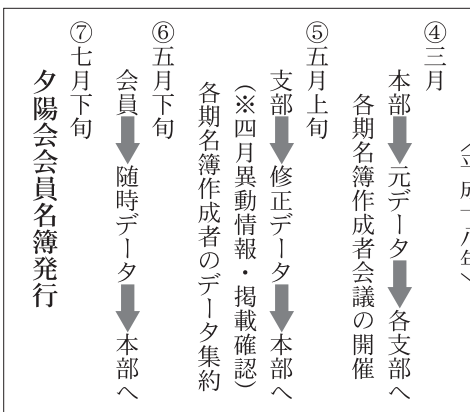
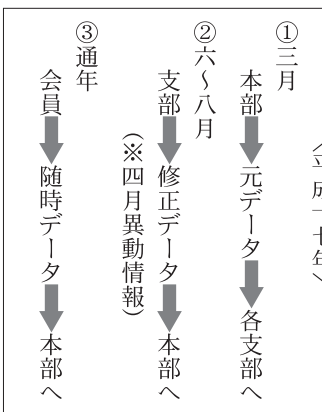
さて、組織部は、平成十六年度版発行直後から平成十八年度版発行のために、各支部からお寄せいただいた会員の所在に関するデータを随時電子入力管理をして参りました。

名簿作成に当たっては、各支部の皆様や各期代表の方々のお力を多くお借りしておりますが、平成十七年四月からの個人情報保護法の全面施行に伴いまして、その取扱に十分配慮するとともに、名簿への掲載についても本人の了解を取らなければならぬ状況が生じてきました。

しかし、すべての会員の皆様への確認が不可能であるため、掲載を希望されない方及び情報の一部削除を希望される方は、最寄りの夕陽会支部または、本部組織部へ連絡下さい。夕陽会ホームページによっても会員の皆様からのアクセスにより、名簿の情報を更新できるシステムを取っておりますのでぜひ活用願います。

平成十八年度版発行までのスケジュールは、次の通りになっておりますので、会員の皆様の御協力をお願いいたします。

平成十八年度版夕陽会会員名簿の作成スケジュール



夕陽会ホームページ再開しました。
アドレス

<http://www.sekiyou2006.sakura.ne.jp/>

前納会費納入会員名簿追加分

夕陽会員計報

Table listing members with columns for name, address, and date. Includes names like 大川秀明, 西村明, 鈴木明, etc.

Table listing members with columns for name, address, and date. Includes names like 伊藤式之氏, 小樽市色内町3の8の401, etc.

(平成十七年十一月十五日現在)

Table listing members with columns for name, address, and date. Includes names like 小林三訓, 吉田弘, 小山昭, etc.

(平成十七年十二月一日現在)

寄贈図書紹介 「自閉症の子への「学び」支援 ～最適化のための実践的アプローチ～」

北海道教育大学附属養護学校特別支援教育研究会編著
同校では、平成十年度より自閉症児教育を切り口とした実践研究を積み重ね、九月にその成果を明治図書より刊行しました。

内容は、基本編と実践編から構成されています。基本編では、「アセスメントやコミュニケーション、学習環境の整備等について、同校の取組を詳しく説明しております。さらに、実践編では十四の優れた事例を掲載し、教育現場で役立つように工夫されています。

今日、「特殊教育から特別支援教育への転換」や「自閉症児教育の充実」が学校教育の重要な課題となっておりますが、まさにタイミングのよい出版であります。同校の実践研究に敬意を表するとともに、多くの方々に読んでいただきたいと思っております。

編集後記

◆会報一八七号をお届けいたします。今号の表紙は、函館の冬を代表するイベント「2005はこだてクリスマスファンタジー」の主会場である末広・豊川町赤レンガ倉庫群に設置された巨大クリスマスツリーです。子どもに関わる悲惨な事件が多発する昨今、海辺で輝くツリーに、未来の明るい夢や希望を託したいものです。

◆十月末、函館駅前松風町に屋台村『大門横町』がオープンしました。大門地区活性化の起爆剤として二十六店舗が軒を連ね、連日にぎわいを見せています。新生棒二森屋もスタートし、大門地区が活気づいてきています。

◆郷土を愛する心は夕陽を愛する心にも通じます。今年の道内支部幹事長会議が行われた八月二十日(土)に夏の甲子園二連覇の偉業を達成した駒大苫小牧高校が、その後、国体・明治神宮大会にも優勝し、史上初となる同一年度三大大会制覇を成し遂げました。感動をありがとうございます！

◆次号依頼・次回「支部だより」は檜山支部と特殊諸学校支部、「支部の歴史を振り返って」は青森津軽支部の予定です。準備をよろしく願っています。(情宣部長 秋元 順一 記 昭49年卒)

本部事務局へのご連絡などは、次の所へお願いいたします。
041-0806 函館市美原3丁目48番6号
北海道教育大学附属函館小学校内
夕陽会本部事務局
電話番号(0138) 46-2235
夕陽会専用(0138) 34-5520
FAX番号(0138) 47-7376
題字 文化勲章受章者 金子賢蔵(鶴亭)氏(昭4卒)